



TITLE:

ヘルダーリン論争(承前):一九五六  
年度ヘルダーリン協會大會から

AUTHOR(S):

高原, 宏平

---

CITATION:

高原, 宏平. ヘルダーリン論争(承前):一九五六年度ヘルダーリン協會大  
會から. 独逸文學研究 1956, 5: 65-73

ISSUE DATE:

1956-12-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/186255>

RIGHT:

# ヘルダーリン論争

——一九五六年度ヘルダーリン協會大會から——

高原 宏 平

昨年ここに報告したヘルダーリンの讃歌「平和の祝祭」をめぐる解釋上の論争は、その後も各研究者のあいだで意見の一致をみることもなく、ひきつゞき活潑に展開されてきた。昨年六月九日、チュービンゲンで行われたヘルダーリン協會の大會でも、午前中のパウル・ベックマンの記念講演と午後の討論會、いずれもそのテーマを讃歌「平和の祝祭」として、ドイツ本國はもとより各國のヘルダーリン研究家の關心と注目をひいた。ここでは、講演によつて明らかにされたベックマンの見解と討論會の模様を若干報告して、前號にのせた報告の補充をしておきたい。

この二年間のあいだに印刷された文獻の數だけでもすでに四十以上にのぼっているこの論争は、やゝもすれば論争の本來の目的であるべき詩の解釋からはなれて、未梢的な揚足とりに墮しかけていないわけでもなかつた。もう一度、眼を総合的な問題に導いて、論争によつて生じた混亂をなんとか收拾しなければならぬ。ベックマンの講演には、こうしたヘルダーリン協會の意圖がそのまま反映しているように見受けられた。ベックマンは、この讃歌の解釋をもう一度ヘルダーリンの詩の世界全體への展望からはじめようとする。そのばあいしかし前提となる彼のヘルダーリン解釋は、一九三五年に書かれた大著「ヘルダーリンとその神々」における立場から一步も出ていないように思われる。そこでは、神々の超越的な力に寄せる詩人の信仰が、ヘルダーリンの文學のもつ獨自の宗教性の基盤として、くりかえし強調されていた。人生における體驗が詩のなかで永遠性を獲得するためには、まずそれが現實の制約

をこえて神話的な地平に移され、永遠の秩序に關聯させられねばならぬ。ヘルダーリンの文學における「祝祭」とか「讚美」あるいは神々にたいする「感謝」とか「呼びかけ」は、いわばこの詩人独自の詩法である神話的賦形の本質的な内容をなしている。そしてこうした「祝祭」乃至「感謝」にさいしてしばしばあらわれる「希望」とか「愛」とか「豫感」とか「感動」とか「願い」といった言葉も、けつしてたんなる抽象概念ではなく、すべて「守神」として、つまり神々の界域と人間の界域を結ぶ存在として把握されねばならぬ。ベックマンはこうしたヘルダーリン解釋によつて、それまでのデイルタイやヴィルヘルム・ベームらによるドイツ・イデアリスムスと詩人との親近性に重點をおいた解釋の傳統を打破つたのであるが、この觀方はそのまゝこんどの「平和の祝祭」の解釋にも持込まれている。ベックマンによれば、この讚歌において頌えられているものは歴史上の一事件とが現實の特定の人物などではない。ここでは「平和」そのものが頌えられているのであり、もちろんその「平和」も歴史上なにか特定の平和ではない、自然のうちにひそむ靈氣にも似た「平和」の息吹きそのものの、「ブネウマ的な力」としてはたらく平和の精神」にほかならぬというのである。ベックマンは小説「ヒューペリオン」の結語を引用する。「死とかすべて人間の悲しみとはいつたい何だろう……一切は悦びのなかから生じ、一切は平和のうちに終るはずではないか。この世の不協和音などは、愛し合う者同志の諍いのようなものだ。葛藤のさなかに和解があり、別れたものもふたたび相手を見出す……すべては永遠の焰と燃える一つに和した生命である。」ベックマンによれば、すでに「ヒューペリオン」の段階において平和はヘルダーリンにとつて人間と自然との聯關の問題であつた。この自然は、一にして多なる存在として人間を相剋の渦中に投ずるのであるが、同時に一にして全なる存在として人間を完全な調和のなかへ返すのである。平和の祝祭は一切の不協和音を消し、すべてを調和のなかに返す自然そのものの祝祭となる。ベックマンはこう述べて、さらにこの讚歌がヘルダーリンの他の作品にたいして持つ特色を「直接に平和を求めるのではなく、平和をまのあたり顯現する力として祝つている」點にあると規定した。「過ぎ去つた清淨素朴の日々を指向する『今』

がここに祝祭をもたらずのだ。もはやヒュペーリオンのように自然の平和に身を委ねるだけでは足りない。またエムペードクレスのように生命の諸力の葛藤をひとつの代表的な犠牲によつて宥和させるだけでも充分ではない。平和の顯現そのものが解き明され祝われなければならぬ。」こういつた背景のもとにこの詩が成立したとベックマンは語っている。さて、この讃歌のなかで平和がそれと名ざしされているのは三三行目、すなわち

Denn unermesslich braust,....

Des Donnerers Echo, das tausendjährige Wetter,

...überläut von Friedenslauten, hinunter.

という箇所と、第十聯一二五行目、すなわち

Und vor der Thüre des Hauses

Sitzt Mutter und Kind,

Und schauet den Frieden.

この二箇所だけである。ここでは、たゞ長い不安な時代が平和によつて克服され、その平和のたたずまいのうちに希望と悦びの豫感が芽生えはじめることが示されているに過ぎない。しかしベックマンは、平和と關聯させて考えねばならぬさらに重要な言葉として、例の論争の中心點となつた「祝祭の主」という言葉を擧げている。ベックマンによれば、自然の分裂・抗争を宥和させ統一する平和そのものが、ひとつの超越的な力として、われわれが生きている現實と次元を異にするより高次の現實を證しする「萬人に識られた神」として、「祝祭の主」という言葉のうちにあらわされているというのである。もちろん、それは抽象的な概念に着せた衣ではない。當時のイデアリスムスの思辨から抽象した思想の代辯者でもないし、またその綜括的表現でもない。いわば信仰のなかでのみ體驗しうるような、高次の界域からわれわれの現實世界の中にとつぜん射し込んで來て現在する超越的な力がひとつの形象に結晶したので

ある。ベックマンはこの形象を一種のアレゴリーと解することをきわめて強く却けている。こうしたベックマンの考え方が、この「祝祭の主」という言葉をナポレオンといった歴史上特定の人物に係づけようとするアレマンらのいわばリアリステイックな観方をはげしく拒否することは云うまでもない。

以上、ほどベックマンの講演を要約してみたのであるが、この平和の「祝祭の主」が平和の化身であるということには誰しも異存あるまい。問題はさてそれをどう解釋するかということであつて、この點ベックマンの説明はきわめて曖昧なように思われる。詩人の宗教性を強調することによつてその曖昧さを曖昧さのまゝに固定しようとする解釋の仕方もあるいは理解できないかもしれないが、たとえばアレゴリーをなぜ率直にアレゴリーと云わず、擬人化をなぜ擬人化といわぬか、その點も私には充分に納得できない。もつとも以上説明したベックマンの見解はたんに見解として述べられたわけではなく、詩全體にわたる一字一句の綿密な解釋によつて裏づけられていたものであり、その後、若干の例外は別として各方面から、讃歌「平和の祝祭」に關してこれまでにあらわれたもつとも權威のある發言と認められていた。そしてまたこの大會の午後の討論會においても、このベックマンの午前中の講演がいわばそのライト・モティーフをなしているようであつた。

午後の討論會は、討論會といつても、これまでに新聞、學術誌などにより一應論争を行つていたベグダ・アレマン、エドゥアルト・ラハマン、フリードリヒ・バイスナー、ヴォルフガング・ビンダー、ヴァルター・ホーフ、ハインリヒ・ブーアら、研究家たちが、それぞれその論文の發表順に登壇して、それぞれの見解を述べるだけであるから、討論會というよりはむしろ研究報告の會といった方がよいかも知れぬ。司會者ヴァルター・ブレッカー（この人はキールの大學の教授とかで、なるほど讃歌「平和の祝祭」に關して二つの論文を發表はしているが、別にヘルダーリン研究家というわけではない）の考えでは、テーマを問題の「祝祭の主」という言葉に限つたということで、一應討論會の形式がととのつたというのかもしれない。しかし、これでは論争の對象が與えられただけであり、討論を成立

たせる共通の場を發見することも、またその共通の場で互いに異つた意見をたたかわすことも、そうした意見の交換によつてヘルダーリーンの文學の解釋をおし進めてゆくことも、限られた短い時間にはとうてい不可能であつた。要するに共通の場がない以上、それぞれの論議の矛盾對立も眞の發展的な意味での矛盾對立にまでたかめられることはなく、それぞれ研究家たちがすでに發表した見解をあらためて確認し、ばあいによつては若干自説の論證を補促したにすぎない。その灼熱した意見の開陳も、けつきよく一般の聴衆には、學者たちのいい氣な獨斷が雜然と並べられたような印象を與えたようであつた。たとえばエルンスト・ミュラーはこの大會の後、正直に云つて討論會はまつたくの失敗であつたと述べている。じつさい極端に云えば、そこでは、ヘルダーリンというひとりの詩人の詩が問題になつてゐることすら忘れ去られていたようである。登壇者たちがつぎつぎに、「祝祭の主」はボナバルトである、いやザトゥルヌスである、太陽神アポロである、キリストである、神の到來を待ちかまえる創造にみちた人間の覺悟である、いや平和そのものである、などとそれぞれの立場から熱狂的に斷定を下してゆく。そういつた論議をたゞ受動的に聽いてゐると、それぞれの立場を統一するものが何かということはもちろん、問題の焦點もますます解らなくなつてしまふ。たゞ全體を通じて感じられるのは、各々の論議が、自説を支える若干の傍證を持つていても、充分に首肯できるだけの方法を持つていないということである。

この點ではともかく一應文獻學者としての限界を守ろうとするバイスナーだけが何らか客觀的な方法をめざそうと努めているようであつた。バイスナーは、詩の中の言葉はあくまでも詩の内部の意味聯關の中だけで解釋すべきであつて、言葉をテキストの外に持出してはならないと主張する。そのさい、バスナーが自説を辯護するために、たとえばドウ・ラ・モッテ・フケーの回想などを引用し、當時のドイツの青年が「ヒュペリオン」にみられるようなフランス革命への熱狂的な感激から醒めてナポレオンにたいする深い幻滅へ移つてゆく過程を説明し、それをヘルダーリンのこの詩のばあいにそのままではめようとしたり、かなり遠廻しの證明を使つてゐることは、聽いている者に多

少奇異な感じを起させないでもなかつた。しかしおそらくバイスナーの考えでは、詩句の解釋のために一應併行して考えられる文獻を持込んだり、詩の前段階を形成する他の草稿によつて詩句を説明したりすることは、詩の内部の意味聯關を破ることにほならないというのであらう。ともあれ、バイスナーが強調しているのは、ヘルダーリンの詩の解釋にあつてはヘルダーリンの詩が詩の内部から要求する方法を確立することであり、その方法も各詩句のもつ文法構成の明確嚴密な把握のみならず、後期ヘルダーリン特有の詩法でもあり、とくにこの讃歌「平和の祝祭」においてはつきり窺うことのできる「音調の變化」への洞察を基礎にしたものでなければならぬということである。バイスナーはすでにこの讃歌をはじめで紹介したさいに附した解説において、詩全體の構成をそれぞれ三詩節づつからなる四つの詩節群にわけて、そのそれぞれの音調が *naiv-idealisch—heroisch—naiv* と變つてゆくことを指摘していたが、こうした音調の變化が解釋の上に反映しなければならぬというのである。たしかにバイスナーのいうとおり、ヘルダーリンの詩の解釋は詩全體の構造の把握からはじめなければ充分とはいえない。ヘルダーリンの詩は、いわゆる體驗詩などと異つて、最初の一瞥から讀者の心を揺ぶるといつたていのものではないのである。おそらく、ここではさらにベード・アレマンのいう *Progress-Regress* の關係も詩の構造全體の理解に不可缺であらう。アレマンはこの「平和の祝祭」と成立期をほぼ同じくする讃歌「ライン河」の草稿の欄外に詩人自身の手で記された作詩の方法に關するヘルダーリン獨特の概念を、彼のいわゆるナポレオン説の根據のひとつに利用しているが、ともかくこの概念はバイスナーの力説する音調の變化とともにヘルダーリンの詩の構造を理解する有力な手がかりといえよう。さて、詩句の音調ということに重點をおくバイスナーは、問題の「祝祭の主」という言葉の出でくる箇所も神體顯現を頌えるきわめて昂揚した調子で歌われているから、これはけつしてたんなる半神や英雄と結びつけられてはならない、また理念としての平和といったものでもありえないと斷定した。もつとも討論會の席上では、たとえばビンダーのようにこの讃歌の「祝祭の主」が「民族の守神」以上のものだといふのなら、彼としても認めざるを得

ない、そして逆にいわゆる「平和」がたんなる平和以上のものであるならば、ベックマンやビンダーの解釋をも容れることが出来るといった意味のことを述べて、若干自説を和らげていた。バイスナーの説はそうした護歩によつて何ら本質的な影響をこうむらないのである。バイスナーが自説の傍證として引用していたヘルダーリンの一七九五年の作品「ヒュペーリオン」の青年時代」からの一節は、たしかに讃歌「平和の祝祭」の内實を照明するとともに、このことを如實に物語つてゐる。ちなみにこの箇所はすでにルートヴィヒ・シュトラウスによつてその論文「ヘルダーリンのヒュペーリオンにおける協同社會の問題」(一九三三年)のなかに引用されているとのことである。

「たしかにこの存在するすべてのものとの淨福の平和こそは祝祭に値しよう。——しかしわれわれが心から慕うこの唯一のものを、われわれはそれと名ざしせぬ。たといわれわれの肌に觸れんばかりに近づこうとも、われわれはその名を口にしない。いかなる日もそれを祝うことができない。この唯一のものにふさわしい神殿はないのだ。われわれの諸精神の諧音とその無限の生長のみによつてこの唯一のものは祝われる。」

解釋はともかくとして、バイスナーの考え方はここではすでにベックマンらの考え方とはほ同一の線の上に立つてゐるものと思われる。たゞバイスナーがその發言の最後に朗讀したマルティン・ブーバーのこの讃歌「平和の祝祭」に關するバイスナー宛の私信は、おそらくバイスナーが云わんとして文獻學者の良心から多少ためらつてゐる點をかなりはつきりうち出してゐるようであつた。すなわちブーバーはそこで就中、この讃歌に歌われている平和、すなわちその終末觀的な世界の淨化のなかで國民とか祖國といったものがヘルダーリンの考えではいつたいどのような位置を占めてゐるのであるか、という疑問を率直に提出したのである。これはおそらくこの讃歌のみならずヘルダーリンの後期の詩作全體の主要なテーマのひとつとして、あらためて考えなければならない問題であらう。

ともあれ、ヘルダーリンの文學のもつ独自の宗教性、たとえばこの詩の平和がもつあらゆる時代を超越したような響きは、きわめて嚴格冷靜な文獻學者をも知らず知らずのうちに獨斷的な神學者の領域にひきずり込んでしまふの



であろうか。ヴァルター・ホーフやハインリヒ・ブーアなどは、むしろ逆手に出て獨文學者と神學者の間の緊密な意見の交流にヘルダーリン研究の將來を積極的に期待しようとしていた。またエドウアルト・ラハマンも、きわめて素朴な方法ではあるが、キリスト教のいわゆる雅歌を解釋するような方法をヘルダーリン研究に應用しようとして試みていた。もちろん、ギリシャ精神とキリスト教精神のジンテーゼなどといった使い古されてもはや何一つ明確なことを云いあらわすことが出来なくなつてしまつた例のヘルダーリン研究にはつきものの極り文句も若干の報告者たちの口から洩れていた。しかし、何れも人を納得させるだけの根據も方法もなく、こうした意味ではわずかにビンダーの暗示した文體の分析が記憶にとどまつたに過ぎない。ビンダーによれば、ヘルダーリンの詩の中に出てくる重要ないわば詩節の核心をなす言葉の前後に附けられたグループをなす數々の形容詞はいずれもシェヴァーベンのパエティスムスの傳統から由來するものであり、この方法によつて詩人は詩人の夢を詩の中に現實化しえたのだというのである。

いずれにせよ、こうした論争を聽いていて感じられるのは、前號にも書いたとおり、現代のヘルダーリン研究が途方もない混亂のなかに落込んでゐるということであり、このままではこの混亂の袋小路から容易に脱け出ることができないという絶望感である。ラハマンが宗教會議にみられるような互讓と協同の精神を訴えても、それはむしろこうした混亂をまねにした悲鳴としか感じられない。たといヘルダーリン研究に新しい視野をひらくような試みがなされても、それはたちまち學問の權威によつて芽のうちに摘み取られ枯死してしまふほかないのである。殘されてゐる道は地味な文體の研究であり、ヘルダーリンの詩の言葉がどのような文學の傳統のなから生れ、またどのようなドイツ語を豊かにし、あるいはいかにドイツ語の詩の世界での可能性をひろげたか、個々の詩により個々の言葉によつてあとづけてゆくことであろう。そしてそれ自體、非常に大きな努力を要する仕事であるが、またきわめて重要な仕事であり、そうした仕事が多くての學者によつて單念に果されてのちに、ヘルダーリンの文學の意義とか本質といった問題があらためて取上げられることになるであろう。今度のこの讃歌「平和の祝祭」の發見によつてひき起さ

れ明るみに出されたヘルダーリン文學の研究の矛盾と混亂は、ある意味でヘルダーリンの文學あるいはもつと極端に云えばヘルダーリンの詩句のひとつひとつが持つている多面性——ピンダーはこれを *Ambivalenz* と呼び、ベックマンは *Doppelbödigkeit* と呼んでいた——と、その多面性を把握するための方法がないことに由來してゐるとも云えよう。そしてこのことはそれだけでひとつの發見であり、出口のない袋小路に入り込んだといつても、そこから新しい地道な研究が始まらないとも斷言できないのである。